The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語文化学 Vol.25　学会の活動/会則/執筆要項
Author(s)	
Citation	大阪大学言語文化学. 2016, 25, p. 105-117
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77736
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学会の活動

2015（平成 27）年 6 月 25 日　大阪大学言語文化学会第 47 回大会

（2015 年度春季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会）

＜研究発表＞　※（　）内は所属の学会

伊藤　　啓（言文）：小説化された金裕貞の恋愛体験 ——「ヒキガエル」を中心に——

井原　　駿（言文）：指示詞複数形の文脈指示用法：ア - 系列・ソ - 系列を中心に

岩本　莉子（言社）：言葉は武器となるか ——リチャード・ライト『ブラック・ボーイ』におけるリテラシーと自己創造

小野　絵理（言社）：現代中国語における指示詞の選択基準 ——話者が自ら述べた事柄を指示する場合——

小野田風子（言社）：スワヒリ文学作家 E・ケジラハビの小説『うぬぼれ屋』と詩集『激痛』に見る作者の自負心と自嘲

金　　兌娟（言文）：なぜ日本のオタク文化は海外を魅了するのか

銭　　蕾（言文）：BL CD の歴史的変遷 ——発売の作品数と原作媒体を中心に——

高田　友紀（言社）：中国ムスリムの漢語拼音文字・消経の表記体系の研究

張　　煜（言社）：汪曾祺の創作時期について ——三つの時期（青年期、中年期、晩年期）

張　　立偉（言文）：内モンゴル自治区における日本語専攻学習者の動機づけに関する考察

八野　幸子（言文）：コーパスを用いた英語理学療法論文の特徴的 Multi Word Expression の分析

林　　桂生（言文）：ASD（自閉症スペクトラム障害）カフェの実践 ——勤労中高年 ASD 者の支援を中心に——

平川　　和（言社）：クローゼットの中のジハード戦士 ——*Disgraced* に見るイスラム系アメリカ人のポストコロニアル・アイデンティティ

山本　玲奈（言社）：*Herzog* における女性表象 ——Madeleine を中心に

ン レイ ション（言社）：Case Study: Sexuality in Bhutan and Japan

＜総会＞

活動報告

委員改選

新委員：

金崎春幸（委員長）、小杉世（副委員長・前期）、三宅真紀（副委員長・後期）、今尾康裕（学会誌担当）、小薬哲也（秋の大会運営担当）、里内克巳（秋の大会運営担当･後期）、中村綾乃（書記）、秦かおり（秋の大会運営担当）、三藤博（春の大会運営担当・前期）、ハン ヒソン（事務局）、安保夏絵、泉谷律子、黄勇、史暁雁、肖倩

会計報告（後掲のとおり）

2015（平成 27）年 10 月 22 日　大阪大学言語文化学会第 48 回大会

（2015 年度秋季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会）

＜研究発表＞　※（　）内は所属の学会

阿部津々子（言文）：シュレージエンのドイツ人少数民族の現状と展望

池坂　麻記（言社）：メイエルホリド作品における見世物芸からのアプローチ

木場安莉沙（言文）：性的少数者問題へのナラティブアプローチ

金　　泓槿（言社）：派独韓国人看護婦の社会史 ――1970・80 年代韓国人看護女性の団体活動――

金　　文姫（言社）：「韓語覚書」の朝鮮語かな表記について

後藤　　篤（言社）：『ロリータ』と戦後アメリカ文壇 ――ポーとの間テクスト的対話をめぐって

瀬戸　義隆（言文）：日本語条件表現におけるバ形式の制約 ――通時的な観点から――

高橋奈穂子（言文）：日本語を母語とする幼児の受け身文における再帰代名詞「自分」の習得について

張　　立偉（言文）：中国における日本語教育カリキュラムの実態調査

林　　桂生（言文）：自閉症スペクトラム障害（ASD）の文化学 ――ASD の読み方／描き方――

山田　　卓（言文）：日本語接尾辞「- 中」について ――動詞の意味構造からの考察――

平成 28 年 3 月 31 日『言語文化学』第 25 号発行

＜査読者＞

今尾康裕、井元秀剛、岡田悠佑、小川敦、小門典夫、小口一郎、坂内千里、瀧田恵巳、田畑智司、西田理恵子、秦かおり、平山晃司、日野信行、福田覚、ホドシチェク ボル、ヨコタ ジェリー、三宅真紀、宮本陽一、渡邊伸治

《平成 26 年度　大阪大学言語文化学会　会計報告》

（単位：円）

収　入		支　出	
予備費（前年度繰越金）	3,208,475	発送費（『言語文化学』23 号等）	39,742
学会費・賛助金	627,000	郵送費（発表会案内等）	9,326
バックナンバー	860	印刷代（『言語文化学』23 号）	259,350
大会補助運営費	92,000	大会補助運営費	186,460
利息	740	大会受付謝礼	18,000
		事務局補助人件費	273,000
		消耗品費	22,945
		振込等手数料	864
		抜刷代	0
		予備費（次年度繰越金）	3,119,388
計	3,929,075	計	3,929,075

（平成 27 年 3 月 31 日 現在）

大阪大学言語文化学会会則

第１条　本会は大阪大学言語文化学会と称する。

第２条　本会の会員は次の２種とする。

1. 通常会員　大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻の教員、大学院学生、大学院修了者（言語文化学専攻の修了者も含む）で所定の会費を納めたもの。
2. 特別会員　元教員及び本会にとくに貢献したもの。

第３条　本会は会員の学術研究を促進するとともに、研究成果の普及をはかり、広く学術全般の進展に寄与することを目的とする。

第４条　本会は前条の目的を達成するために研究会を開催し、機関誌を発行する。

第５条　本会の会員は機関誌の配布を受ける。

第６条　本会は第３条の目的を達成するために年１回、言語文化学会総会を開催する。

第７条　本会に次の役員をおく。

1. 会長及び委員、監事をおく。
2. 会長を言語文化専攻長、副会長を副専攻長とする。
3. 委員は原則として教員より８名、大学院学生より５名を選出する。なお、別に事務担当をおくことができる。
4. 監事は２名とし、会計の監査にあたる。監事は会長が委嘱する。

第８条　本会に委員会をおく。

1. 委員は前条３の委員をもって構成する。
2. 委員会に委員の互選による委員長、企画・編集委員（若干名）、会計委員（若干名）をおく。
3. 委員会は本会の運営にあたる。

第９条　役員の任期は次の通りとする。

1. 会長及び副会長の任期は言語文化専攻長及び言語文化副専攻長の任期に従う。
2. 委員の任期は１年とする。
3. 監事の任期は１年とする。

第10条　本会の経費は会員の会費及びその他の収入による。

1. 会費は付則の定めるところによる。
2. 本会の会計年度は４月より翌年３月までとする。

第 11 条 本会の事務局は大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻内におく。

付則　1. 通常会員は会費として年間 3000 円を納める。

2. この会則の改正は、総会において出席者の 3 分の 2 以上の賛同を必要とする。

3. 本会則は平成 3 年 5 月 8 日より発効する。

平成 19 年 10 月 25 日改定

『大阪大学言語文化学』執筆要項

1.「論文」または「研究ノート」について

本文の言語が日本語か日本語以外かによって提出するファイルが異なるため、下の表で確認すること。電子媒体のファイルのみ、事務局（genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp）宛の電子メールに添付して提出すること。

＜提出ファイル（本文が日本語）＞

番号	種類	ファイル名	内容（矢印の順に頁立てすること）
1	Word	jltookoo_yourname.doc	表紙 → 要旨 A → 要旨 B → 本文
2	PDF	jltookoo_yourname.pdf	（表紙は不要）　要旨 A → 要旨 B → 本文
3	excel	count_yourname.xls	（文字カウント表、ホームページからダウンロード）
4	excel	check_yourname.xls	（チェックシート、ホームページからダウンロード）

＜提出ファイル（本文が日本語以外）＞

番号	種類	提出ファイル名	内容（矢印の順に頁立てすること）
1	Word	jltookoo_yourname.doc	表紙 → 要旨 A → 本文
2	PDF	jltookoo_yourname.pdf	（表紙は不要）　要旨 A → 本文
3	excel	count_yourname.xls	（文字カウント表、ホームページからダウンロード）
4	excel	check_yourname.xls	（チェックシート、ホームページからダウンロード）

＜注意点（共通）＞

ファイル名等	表中の提出ファイル名とし、「yourname」を各自の氏名（「tanakaminoru」や「johnsmith」等）に置き換えたものに変更すること。 ＊番号 2 の PDF ファイルについては、本表下に示す方法等により作成者情報を削除した上で提出すること。
用紙	A4 サイズ、横書き
ページ番号	本文だけに付ける。（フッターで中央に）
本文	和文または欧文に限る。 和文原稿：40 字× 30 行（タイトル、本文・脚注とも 11 ポイント） 欧文原稿：30 行（タイトル、本文・脚注とも 12 ポイント） ＊文字間、行間を狭めることはできない。 ＊引用文のポイント数を落とすことはできない。

＊PDF 書類作成時の注意

PDF ファイル本体、ファイルのプロパティのいずれにも著者情報が書き込まれないよう注意すること。

・PDF ファイル作成時に「作成者」の欄に名前が入っている場合は消しておくこと。（図 1 は Mac OS X 環境の場合）

・Adobe Acrobat で PDF ファイルを開き，プロパティを確認する（図 2、3 ＊いずれも Mac OS X 環境）。

図 1　PDF 書類作成時の確認画面（Mac OS X 環境）

図 2　Adobe Acrobat でのプロパティの確認（1）

図 3　Adobe Acrobat でのプロパティの確認（2）

(1) 原稿の種別

一度提出された原稿の種別（「論文」、「研究ノート」）は変更できない。なお、「研究ノート」は以下のいずれかに相当するものとする。

1. 学術論文に準ずるもの（完結性には欠けるが、速報に値する研究成果）
2. 充分な注釈を付した、公刊に値する資料・文献などの翻訳
3. 充分な注釈を付した、公刊に値する調査結果

「研究ノート」の場合は、以下の規定において、「論文」を「研究ノート」と読み替えること（(5) の (b) 原稿の長さ、字数を除く）。例えば、(3) および (4) の規定では「論文要旨 (A)」「論文要旨 (B)」と書くようになっているが、「研究ノート」の場合は「研究ノート要旨 (A)」「研究ノート要旨 (B)」と書くこと。

(2) 表紙

表紙ページに以下のように記入すること（[ ] 内は説明)。

論文の題名［本文と同じ言語］*［半角アステリスクを１つ付ける］
［1 行あける］
執筆者氏名［本文と同じ言語］**［半角アステリスクを２つ付ける］
［1 行あける］
キーワード３語［本文と同じ言語］
［3 行あける］

*［半角アステリスク１つと、半角スペース］ 論文の題名［本文と異なる言語］(執筆者氏名)［丸かっこをつける。本文と異なる言語で。非ローマ字言語の場合は、ローマ字表記も付記する］
［1 行あける］
**［半角アステリスク２つと、半角スペース］ 執筆者の所属［日本語で書く］

・タイトルとサブタイトルのつなぎ方、スペース、大文字と小文字の区別等は、以下の例にあわせること（論文名等は『言語文化学』Vol.12 から引用)。

— 論文題名の書き方 —

(日本語、中国語などの場合)
フランス語化政策とマイノリティー
—ケベック州移民統合政策の縮図としての中国系移民—
(英語の場合)
An Unweeded Garden That Grows to Rhyme:
The Relationship between William Shenstone' s Gardening and His Poetics
英語の場合は、タイトル、サブタイトルの最初の語の先頭を必ず大文字にする。それ以外の語も、冠詞、前置詞、等位接続詞、不定詞の to を除いて、大文字で始める。(それ以外の言語は、それぞれの慣例に従うこと)

— 氏名の書き方 —

(日本語例) 言文　太郎
(朝鮮語例) 겐분 다로 (GENBUN Taro), 김민호 (KIM Minho)
［朝鮮名・中国名の場合は、姓名を分かち書きしないこと。］
(中国語例) 胡　琳 (HU Lin)［ローマ字表記は日本語読み (KO Rin) 等でも可。］
(英語例 1) GENBUN Taro［姓 (全大文字) ＋名前 (先頭だけ大文字)］
(英語例 2) Taro GENBUN［名前 (先頭だけ大文字) ＋姓 (全大文字)］
(ロシア語例) ИВАНОВА Мария (IVANOVA Mariya)［ローマ字表記も付けること。］

— 所属の書き方（必ず日本語で）—

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程（学生の場合）
大阪大学言語文化研究科（常勤教員の場合）
大阪大学非常勤講師（非常勤講師の場合）　など

— キーワードの書き方 —

（日本語例）キーワード：ホテル、都市メディア、消費文化
（英語例）Keywords: *ut pictura poesis*, the garden-poetic relationship, Thomas Percy's ballads

(3) 論文要旨（A）

日本語で1,000字以内。冒頭に「論文要旨（A）」と書き、日本語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(4) 論文要旨（B）

本文を日本語で執筆した場合のみ、提出が必要。
日本語以外の言語で書く。欧文の場合は400ワード以内。中国語、朝鮮語の場合は1,000字以内。冒頭に「論文要旨（B）」と書き、要旨（B）と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(5) 本文

(a) 執筆言語

日本語、英語、独語、仏語のいずれかの言語で執筆することが可能である。但し、英語、独語、仏語のネイティブスピーカーは、母語以外の言語を選択すること。

(b) 原稿の長さ、字数

「論文」和文ではA4用紙13枚以内、欧文ではA4用紙18枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数）。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。かつ、本文の字数（図表・参考文献・注など全てを含む）は和文で13,000字以内、欧文で5,000ワード以内とする。なお、半角・英数は0.5文字と数えること。

「研究ノート」和文ではA4用紙10枚以内、欧文ではA4用紙15枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数）。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。かつ、本文の字数（図表・参考文献・注など全てを含む）は和文で9,000字以内、欧文で4,000ワード以内とする。

執筆者は原稿提出の際、言語文化学会ホームページより「文字カウント表」をダウンロードし、書式に従って字数を申告する。

(c) 書式設定

余白は上 35mm、下 30mm、左 28mm、右 28mm に設定する。

(d) 冒頭に本文と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(e) 章・節番号

「0」ではなく「1」から始めること。漢数字表記は認めない。

— 章・節番号の書き方 —

1（半角スペース）セクション題名（「1.」「1 章」「Ⅰ」などとしない）

1.1（半角スペース）サブセクション題名（ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1」「1.1.」とはしない）

1.1.1（半角スペース）サブサブセクション題名（ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1.1」「1.1.1.」とはしない）

(f) 和文中の句読点「。」と「、」を用いる。

(g) 数字表記

横書きであることを考え、原則としてアラビア数字を用いる。アラビア数字は半角で入力する。

(h) 文字修飾

網掛けは希望通りの濃さに印字されない可能性があるので、使用しないこと。過度な文字装飾は避けること。

(i) 例文番号

例文の先頭に (1)、(2)、(3) などの丸かっこ付きの番号を用いる。下位区分には、a.、b.、c. を用いる。

— 例 —

(1)　東京に行った。

(2) a. *田中さんに行った。

　　b. 田中さんのところに行った。

(j) 図表

図表には番号と図表名を本文と同じフォントサイズで付ける。図表中の文字のサイズは原則として 9 ポイント以上とする。

(k) 参考文献・引用文献の表記

参考文献の一覧は本文の後につける。下記の例を参考にすること。

— 日本語文献例 —

著者名『著書名』発行元、発行年。

著者名「論文名」『掲載誌名』巻号数、発行元（発行団体）、発行年、pp.1-16。

著者名（発行年）『著書名』発行元、発行年。

外国語文献の場合は、それぞれの言語の慣例に従うこと。

(l) 注

注は通し番号をつけて頁末脚注とする。注のフォントサイズは、本文と同じとする。本文中の注番号としては、「これは例文です[1]。」のような上付き文字を用いる。

(m) 謝辞

査読に不都合があるので、応募時には謝辞を書かない。採用決定後は短い謝辞を記載してもよい。

(n) その他

査読に不都合があるので、応募時には本文、または注釈に投稿者の匿名性を損なう事柄を書き込まない。自分の過去の学会発表、論文に基づいて本論文を執筆する場合、20XX 年の発表に基づいている等を書くのは良いが、発表者名は採用決定後に書くこと。

2.「書評」および「図書紹介」について

どちらも和文で A4 用紙 4 枚以内（4,000 字以内に）、欧文で A4 用紙 7 枚以内（1,800 ワード以内に）。「図書紹介」は、当該年度出版または出版予定で、筆者自身が執筆または編集に携わった図書の紹介記事とする。「書評」は、それ以外の図書を対象とする。

用紙は A4 サイズで、横書きとする。和文原稿の場合は、11 ポイントで 40 字 ×30 行、欧文の原稿の場合、12 ポイントで 30 行とする。提出方法、その他の規則は論文、研究ノートに準ずる。提出原稿の形式は以下の通り。

(1) 1 枚目：書評者名、書評の対象となる本の書名

(2) 2 枚目以降：書評の対象となる本の書名、著者、出版社、（出版地、）出版年度、ISBN、本文

3. その他

＜投稿内容の変更＞　投稿希望時の論文タイトルと比べて、内容が大きく異なる原稿

を投稿することはできない。

＜ネイティヴ・チェック＞　本文、論文要旨とも、母語以外で書かれた部分については、かならずネイティヴ・チェックを受けてから提出すること。文章力が著しく劣る場合は内容の如何にかかわらず不採用となることがある。

＜第三者のチェック＞　一定の水準で査読が行われるために、執筆者は事前に読み合わせを行うなど、投稿前に第三者に目を通してもらうことが望ましい。

＜無断引用・剽窃＞　引用箇所については、出典をはっきりと示すこと。査読段階で盗用・剽窃が指摘された場合、不採用とする場合がある。

その他執筆に関して不明な点があれば、大阪大学言語文化学会事務局（genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp）まで問い合わせること。